

日系企業で働く中国人日本語学習者の言語行動

—依頼会話の音声データに基づく調査研究—

徐 曼

Chinese learners of Japanese working in Japanese companies:

A study on Chinese learners' language behaviors based on request dialogues

Xu Man

1. はじめに

言語は独立して存在するものではなく、常にそれぞれの社会の文化や習慣などに従って使用されながら、その役割を果たしている。中国人が日本語を習得するにあたって、当然中国語を支えている中国の文化や習慣などの影響を受けているはずである。そのため、本論文では母語影響の視点から「依頼」という言語行動を考察することにした。

依頼接触場面の会話データではあるが、本論文では依頼行為、依頼表現だけでなく、会話に用いられる否定疑問表現や情報のなわ張り関係も考察した。なぜならば、「依頼」という言語行動は狭義の依頼表現だけで成り立っているわけではないし、依頼に関する諸要素を総合的に考える手立てが必要であろうと考えたためである。

2. 先行研究

依頼に関する研究は今まで既に多くなされてきたが、その多くは依頼表現に注目し、相手との関係や場面の種類によって、依頼表現がどう変わるのか、あるいは丁寧さの観点から分析したものが多かった(馬場・廬 1992, 浜田 1995)。しかし、形態的、語彙レベルの研究だけで取り扱いきれない依頼表現の存在が気づかれ、熊取谷(1995)などが発話行為としての依頼から談話行動としての依頼への視点移動の必要性を指摘した。そうした流れの中で、依頼の会話構造や依頼発話、依頼会話の展開パターンなどに注目する研究が増えてきた(柏崎 1995, 許 2002, 伊藤 2002, 張 2004)。

しかし、それらの先行研究の中には、母語の影響を扱い、日中比較対照を行い、分析したものは数多くない。言語学の研究においては、L1とL2の相違点や類似点を比較して、学習の難易度や誤りを予測したり、学習者の誤りについて分析したりする対照分析(Contrastive Analysis)は有効的な手段であると筆者は考える。第2言語習得研究ばかりでなく語用論や社会言語学においても、あえて対照分析がむしろ当然な手段として利用されていると思われる。特に談話分析や会話分析においては、その実証性を高めるために、可能な限り学習者の母語の体系とそれを取り巻く文化・習慣的なものと比較対照する必要がある。

本論文では、以上の先行研究を踏まえて、発話のメカニズムや会話に用いられる表現に着目し、母語の影響を考察し、対照語用論的観点から分析し考察する。日中両言語の比較対照を通じて、相違点や類似点を探す。また、それらの相違点や類似点は日本語の学習過程にどのような働きかけがあるのか、つまり、中国人日本語学習者はどのように母語に影響されるのかなどを明らかにする。日本語と中国語の違いを提示することは、学習過程において中国人学習者に日本語の誤用を意識的に減少させ、現れうるミスを防ぐことにつながると考えられる。

3. データ作成と分析方法

2007年10月~2008年6月に、ロールプレイ(模擬会話)で依頼接触場面を設定して会話

の音声データを収集した。本論文は依頼接触場面での依頼者の言語行動に注目する。つまり、依頼者の役を演じる中国人日本語学習者は本論文の被調査者である。そして、日中両言語話者の言語行動を対照分析するために、中国人日本語学習者(依頼者)と日本語母語話者(依頼相手)との会話だけでなく、日本語母語話者同士の依頼会話と中国語母語話者同士の依頼会話も録音した。

会話を分析するにあたり、機能を担う move という分析の単位を使用することにした。本論文では、ノックの音がしてから終わるまでを「会話」とみなし、会話中に見られる下位分類の発話の集合体を move として、「前置き」「状況確認」「恐縮の意の表明」「理由&情報提供」「依頼」「拒絶」「再依頼」「条件限定」「懇望」「承諾」「承諾確認」「終わりの挨拶」などの move を設定した。

4. 日中対照分析 1 - 依頼発話のメカニズム

発話のメカニズムという側面から対照分析をした結果では、次の3点が明らかになった。

先行研究に見られる、中国人は発言がストレートで唐突であるが、日本人は前置きが多く、回りくどいという説とは異なり、職場において公的な仕事を依頼する時に日本人は中国人と同じように前置きが短く、単刀直入に仕事の話のことを発見した。

依頼が断られた後、中国人依頼者と日本人依頼者は異なる反応をした。日本人依頼者は、恐縮の意の表明をしておいてから、相手にかかる負担を明確にし、縮小した上で、慎重に再依頼しているが、一方、中国人依頼者は、拒絶された後、一回目の依頼よりさらに強く、再度自分の願望を述べた者が多かった。

依頼相手に承諾してもらった後、中国人依頼者と日本人依頼者は発話が違った。中国人依頼者は相手の承諾と好意を受けた後、「ありがとう」などの感謝を表す表現しか用いなかったが、日本人依頼者は「ありがとう」などの感謝を表す表現

以外に、「すみません」のような表現も用いた。「ありがとう」よりは、むしろ「すみません」のほうが日本人依頼者に多用されるようであった。

5. 日中対照分析 2 - 会話に用いられる表現

会話に用いられる表現という側面から対照分析をした結果では、次の3点が明らかになった。

補助動詞「～てくれる」「～てもらう」が活用される日本語の間接依頼表現形式は中国語にはないので、中国人日本語学習者がそのような表現を使用する際には誤用が多く生じた。中国語の「～、好吗?」のような疑問文は、文の動詞の動作主によって、対応する日本語は述語が大きく変わるのである。それが十分理解できていない中国人日本語学習者の誤用が筆者の会話データに多くあった。

中国語では正反疑問文と肯定疑問文の使用が自然なところで、日本語では、特に依頼表現は、否定疑問文が用いられるケースが多い。肯定疑問文より否定疑問文を用いるほうが丁寧な言い方になる。また、日本語母語話者が頻繁に使用する否定疑問表現には、中国語に直訳すると不自然になったり、中国語にまったくない表現になったりするものが多い。このような否定疑問表現は中国人日本語学習者にとっては大変分かりにくく、表現意図を正確に判断するのが困難である。筆者の会話データには、日本語母語話者の否定疑問表現の意味が理解できなかった中国人日本語学習者の例がある。

情報のなわ張り関係には、日本語と中国語に顕著な相違点が二つある。日本語では、話し手は与えられた情報が自己のなわ張りに属するか否かのみならず、聞き手のなわ張りに属するか否かをも考慮して文形を決定しなければならないので、日本語は「直接形」「直接ね形」「間接形」「間接ね形」の4つの文形を持つ。それに対して、中国語の話し手は、その情報が

聞き手のなわ張りに属するか否かは考慮せずに文形を決定するので、中国語は「直接形」と「間接形」との2つの文形しか持たない。以上が第一の相違点である。第二の相違点は、情報が話し手、聞き手にとっても<遠>情報であり、話し手、聞き手の両者のなわ張り外にある場合には、日本語では「間接形」しか用いられないが、中国語では「間接形」も「直接形」も共に自然な表現である。日中両言語のなわ張り関係の相違が理解できていない中国人日本語学習者の誤用が筆者の会話データには多くあった。

6. 今後の課題

今後の課題としては、録音調査の見直しである。年齢別、性別、職業別にそれぞれの被調査者

数を増やし、より多くの会話データを集める。

筆者の学習経験から見て、日本語の運用能力は学習年数や、学習環境、滞日年数などと関係があると思われるが、今回の調査では見られないので、調査方法を検討する必要がある。日中両言語の差異をさらに深く研究する。依頼会話ばかりではなく、他の言語行為においても、母語の影響を検討し、日中両言語の相違による学習者の困難さと誤用が予測できるような研究を進める。研究成果を日本語教育現場へどのように活かしていけばよいか、そのよりよい貢献方法、つまり、具体的にどのような授業が効果的であるかについては今後の課題として検討していきたい。

参考文献

- 安藤美保 (1997) 『手紙における依頼のストラテジー 日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較を中心に』愛知教育大学大学院修士論文
- 伊藤有加 (2002) 『接触場面における依頼会話分析』愛知教育大学大学院修士論文
- 大西智子 (1989) 「中国語と日本語の否定疑問文」『中国語学』1989年10月号, 通号236, pp. 105-115, 日本中国語学会
- 柏崎秀子 (1995) 「談話レベルで捉える丁寧さ - 談話展開が丁寧度評定に与える影響 -」『亜細亜大学日本文化研究所紀要』1 pp. 61-75, 亜細亜大学
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 - 言語の機能的分析』大修館書店
- 許清平 (2002) 「日中母語話者における『依頼』発話行為に関する研究 - 意味公式の使用について -」『語文と教育』16号, pp. 31-39, 鳴門教育大学
- 熊井浩子 (1992) 「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』Vol.11, 11月号, pp. 72-80, 明治書院

- 熊谷智子 (1995) 「依頼の仕方 - 国研岡崎調査のデータから」『日本語学』Vol. 14, 10月号, pp. 22-32, 明治書院
- 熊取谷哲夫 (1995) 「発話行為理論から見た依頼表現 - 発話行為から談話行動へ -」『日本語学』Vol. 14, 11月号, 明治書院
- 田野村忠温 (1991) 「疑問文における肯定と否定」『国語学』164集, pp. 128-115, 国語学会
- 張穎 (2004) 「依頼会話の展開パターンに関する日中対照研究」『言語文化と日本語教育』第28号, pp. 8-13, お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 辻周吾 (2007) 「中国日系企業に従事する日本人と中国人とのコミュニケーションに関する調査研究 - 注意喚起表現、依頼懇願指示表現、賞賛表現、断り表現の特徴及び誤解や摩擦の解明をめぐって」『日中対照言語学研究論文集: 中国語からみた日本語の特徴 日本語からみた中国語の特徴』pp. 453-482, 和泉書院
- 津田葵 (1989) 「社会言語学」柴谷方良・大津

由紀雄・津田葵『英語学大系第六巻 英語学の
関連分野』大修館
馬場俊臣・廬春蓮(1992)「日中依頼表現の比較
対照」『北海道教育大学紀要』(第1部A)Vol. 43,
第1号, pp. 57-66, 北海道教育大学
橋内武(1999)『ディスコースー談話の織りなす
世界』くろしお出版
浜田麻里(1995)「依頼表現の対照研究 - 中国語
における命令依頼の方略」『日本語学』Vol. 14,
10月号, pp. 69-75, 明治書院
馮富栄(1993)「日本語学習における母国の文化・
習慣の影響について 中国人の学習者を対象と
して」『名古屋大学教育学部紀要教育心理学科』
Vol. 40, pp. 175-182, 名古屋大学教育学部
馮富栄(1994)「第2言語学習研究及び日本語学
習研究の展望 母語の影響という視点から」『名
古屋大学教育学部紀要教育心理学科』Vol. 41,
pp. 49-61, 名古屋大学教育学部
ルース・ベネディクト 長谷川松治 訳(1951)
『菊と刀 日本文化の型』現代教養文庫
水野かほる(1996)「『依頼』の言語行動における
中間言語語用論 中国人日本語学習者の場合
」『言語文化論集』Vol. 17, 第2号, pp. 91-106,
名古屋大学言語文化部
村上京子(1993)「教育心理学と実践活動 - 日本
語教育に関して」『教育心理学年報』33, pp.
155-160, 日本教育心理学会
森山卓郎(1995)「丁寧な依頼のストラテジーと
運用能力 - 依頼の手紙の書き方を例に」『日本語
学』Vol. 14, 10月号, pp. 94-101, 明治書院

Ellis, R. (1985) *Understanding Second
Language Acquisition*. Oxford: Oxford
University Press

Schmidt, R. (1990) The role of consciousness in
second language learning. *Applied linguistics*,
11, pp. 129-158

Schmid, R. (1993) *Consciousness, learning, and*

interlanguage pragmatics. In G. Kasper, &
S. Blum-Kulka (eds.), *Interlanguage
Pragmatics*, pp. 21-42. Oxford and New
York: Oxford University Press

Schmidt, R. (1995) *Consciousness and foreign
language learning: A tutorial on the role of
attention and awareness in learning*. In R.
Schmidt (ed.), *Attention and awareness
in foreign language learning*, pp. 1-63.
Honolulu, HI: Second language and
teaching & curriculum Center, University
of Hawaii